HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	科学的に見た雷鳥クラブ
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Citation	雷鳥時報, 3
Issue Date	1933-02
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77695
Type	column
File Information	A010_052S710_Part3.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

云ふべきものを信じたいと思ふのである。自然科學の世界は時空共に有限であるのに對して自分は無限を信じたいのである。そうしてどこから來てどこに行くのか、又或る時は爛漫たる春に人間を狂喜せしめるかと思へば或る時は殘虐なる寒氣にすべてを死の世界と化して人間を慴伏させ人間の感情や理智がどうであらうと頓着なく振舞ふ、自然に何とはなしに心を惹かれるのだ。此の自然の最も強い最も露骨な一面として山が吾々を如何に強く呼懸けて來るかは今更云ふ迄もないし、この山に限りない滋味を見出し得るを云ふ事も自明の理であらう。

美濃の山が吾々の心を最も強く惹くやうになつたのは美濃の山が他の山々に勝つた自然を持つと云ふことではない。勿論山はその在る地方によつて夫々特異性を持つことは云ふ迄もない。しかし吾々が美濃の山に執着を感ずる最も大きな理由は矢張り何と云つてそれらと近くあり、從つてよく多く知るが故の出來ると云ふことであると思ふ。又それだけ美濃の山の開拓が決して吾々に義務づけられて居るわけではないが、これを怠ることは一面自ら山岳人を以て任ずる吾々に自責を感ぜしめる所以であり況んや他人の手にその開拓を委ねるに於てをや。こゝに吾々をして美濃の山を生命線と叫ばしめる所以があるのではないか。

＊　＊　＊

科學的に見た雷鳥クラブ

鈴木榮太郎

題が大きいねェ。「だが僕はさう思うんだ。此前の「雷鳥時報」を見た時、雷鳥クラブはゲゼルシャフトからゲマインシャフトに移つて來たとねェ。社會學の講義見た樣になるがゲゼルシャフトとは利益社會或ひは間接社會學と譯し、ゲマインシャフトは共同社會或ひは直接社會と譯して居る。謂ふ意味は何か特定の目的の爲に卽ち或る利益の爲に其利益なり目的なりを達成する手段として人が結合したものがゲゼルシャフトである。結合する事其事を目的としたのではないから間接社會とも云へる譯である。此に對して結合そのものゝ爲の結合、卽ち他に目的がある譯ではなく人が人を愛着して結合する集團がゲゼルシャフトである。結合を直接に目的とした結合である。世の中がセチカラクなるとゲゼルシャフトは漸次なくなつて行く。本來ゲマインシャフトであつたものさへも漸次ゲゼルシャフトの色彩を增して來て居るのである。我が雷鳥クラブは正に此大勢に逆行して居るものである。雷鳥クラブは本來は何と云つても山岳登高を愛好する者の一つのゲゼルシャフトであつたと思ふ。それが此前の「雷鳥時報」を讀むと山に關する話し丈ではなくて、主として自己の身邊を語り合つて居る、眞實な友達同志の間に交はされる言葉だ。親子とか友達の關係は正にゲゼルシャフトであるが、雷鳥クラブは全く友達仲間の一寸組織されたものと云ふ樣な形である。人格が人格を求めてする結合である。此は社會學的に見て今日の集團の一般的傾向を考慮に入れて見るなら極めて興味ある集團だと僕は思つて居る。此美はしい姿を出來る丈發展させやうぢやないか。だが然し僕は社會學を少し知つて集團に關する一般的傾向を知つて居る丈に、又心配す可き點もすぐ目につくのだ。と云ふのはゲマインシャフトは其個人間の關係が面接的卽ち直接に顏も心もよく知り合つて居る事に其特徵がある。此特徵が薄らぐとゲゼルシャフトにならなければ存立し行かなくなるのである。人の面接的結合の集團の限界は約七十人位だと云はれて居る。これ以上の人數になれば其成員が互に他を直接に愛着し合ふ事はむつかしいのである。そこでこれ以上の集團になれば何が成員を結束する力のある或る目的を標示してその目的の爲のゲゼルシャフトに變へるのである。我が雷鳥クラブは年毎に其成員は增し成員間の關係は面接的でなくなり、名簿を通じて知ると云ふ事に漸次なつて行く。そこで員數から云つても結合の性質から云つてもゲゼルシャフトである事は漸次不可能になつて行く筈である。何としたものか諸君どうぢや。

こゝまで讀んで誰かクス〳〵笑つてる者もありさうで仕方がない。「心配ありませんよ。先はどうかなりますよ」分さんの聲が聞こえる樣だ。

生命線について一言

分部桃彥

去年の九月十八日以後生命線といふ言葉が發明されました。或るひはそれ以前にあつたかも知れませんが兎に角今のやうにはつきりと國民の腦裏に刻み付けられてゐなかつたことは事實のやうです。今では生命線と云へば、オ、滿洲のことかなんてそして生命線と云はれる以上それは死守すべきもの、そうです生命線が斷たれると死ですからね。內田外相は國を燒土に化してもと云ひましたエライと思ひます。

日本の生命線は滿洲だ。GAC山岳部の生命線は美濃飛驒の山だ。對稱がチト變ですが。變だつて何んだつてかまやあしないです。生命線とキメてしまひました。

美濃飛驒の山が私等の生命線であるといふ前提の下に少し言ひたいことを言はせてもらひますが、言ひ過ぎて後から平身低頭しても赦されませんから、初めの中に暴言多謝々々。何うも今からシヤベロウとすることは現役の諸君や岐阜在住の諸兄に當てこすりを言ふことになるかも知れませんが、不悪お赦しの程を懇願致します。前置きはこの位にして、卒直に本論に入りますが——。

美濃飛驒の山を科學的に研究し、解剖して、又一面に於ては土俗學的と云ひますか、兎に角あの幅の廣い中部日本の、民族のクラシカルな傳統といふか、雰圍氣と云ひますか、そう云ふものを最も多く抱擁して、しかしいつかは物質文明の殘忍性に破壞し竭される風前の燈のやうな運命に彷着してゐる、美濃飛驒の土俗を解題し觀察して、これを記錄し又展示すること、それがGAC山岳部の傳統的使命ではないかと、つくづく考へさせられます。

今や——少し大きく見えを切りませう——日本山岳界は擧げて群小山岳家が、やれアルピニズムの精神だの、或るひは又都會人が境遇の支配から案出した自己僞瞞的(?)低山趣味だの、何んだかだと、それに又油を注すヂアナリズムの態度、眞に以て鼻持ちならぬ狀態です。そして此頃雨後の筍のやうに出しやばつて來る山岳書がこれまた日本山岳界の動きを指示してゐる羅針盤であるとしたならば少しなさけなくなるのです。一體山の本を讀んで不愉快になるなんてことがあらう筈がありませんが、しかし一さいならずその氣分を釀生させられることを告白しなければならないのです。

登山術の著書は登山術に對する廣いそして多方面に亘つての長い間の智識や經驗と、山に對する理解から生れる。之らの智能なくば書かるべき對象の登山術そのものは何等公表さるべき價値を持たぬものであらうと大島さんは言ふてゐます。いま私は、マウンテンクラフト以外の如何